



小説 大熊狸喜
表紙 光星
挿絵 NO.ゴメス

僕の幼なじみは
キヤバ嬢 なわけ
がない

二次元ドリーム文庫 / PDF立ち読み版

プロローグ あるホールスタッフ

第一章 駅前キャバクラ「びんきいはあと」

第二章 桜乃の野望・全国版

第三章 双子ちゃんの舌と、幼なじみの唇

第四章 真由の肌、清白姉妹の肢体

第五章 幼なじみの告白

第六章 キャストたちとの時間

エピローグ いつも一緒に

006

014

050

070

103

147

188

241

登場人物紹介

Characters



なのがわ ゆみこ
奈野川 優美子

女子大生。キャバクラ「びんきいはあと」で働いている。光一郎の幼なじみ。

あおいごもん さくらの
葵御門 桜乃

全てにおいて自分が最高の存在だと信じている生粋のお嬢様。優美子と同期。

いぬがさき まゆ
犬ヶ崎 真由

天然系のドジっ娘お姉さん。お酒好きでグラマラスな身体つきをしている。

すずしろ
清白 シフォン

双子キャバ嬢の姉の方。無表情でちょっぴり不思議ちゃん。ロリロリ。

すずしろ
清白 プディング

シフォンの妹。こちらも姉同様に感情が読めない。腹話術が得意らしい。

さんじょうこういちろう
三条 光一郎

主人公の大学生。小さなアパートで一人暮らしをしている。性格は真面目。

「あんっ——」

天然キャストがノンビリ慌てて、オシボリを手取る。そして、少しだけお酒をかぶった股間が大きく膨らんでいるのを見ると、やつぱりノンビリと驚いていた。

「ごめんなさい……あら、まああ——」

（やつ、やばいっ——怒らせてしまったかも……）

そんな光一郎の考えはしかし、大きく外れた。中から突き上げられたズボンを見た真由がくれたのは、怒りではなく、嬉しそうな、溶けるような声だった。

「光くんたら、わたしの写真を見て、こうなっちゃったのね——」

不埒な膨らみに向かって、輝く笑顔を見せる真由は、オシボリでズボンを軽く拭う。女性の掌は、布越しでも包み込むように柔らかくて、ゾクンと甘い刺激を感じる。

更に肉体を密着させて、そつとジッパを下ろし始めた。

「わっ——あ、あの……♥」

突然の行動に、パニックになりかける。慌てて拒否をするものの、そつと掌を取られ、見上げられた。

「いいの、光くんはこのままで。お姉さんが『いい子いい子』してあげる——」

甘い声色でささやかれると、青年の胸は期待感でいっぱいになってしまう。誘惑に引かれながらも、周りを見て冷静さを取り戻そうとする。

(いや待て、僕っ——ここは冷静に……あれ?)

見ると、二人の初老なお客さんが、阿波踊りとドジョウ掬いの踊り対決を始めて、みんなの注目を集めていた。

向かいのボックス席で接客している優美子は、こっちに背中を向けている。他の、まだ顔見せされていないキャストたちも、同じくおじいさんたちの対決を応援していた。

バレないかも——。そんな言葉が頭をよぎる。

そして天然お姉さんの手で露出されたペニスは、堅く熱く天を向いていて、自らの欲求を素直に体现していた。

「わああ……おつきいんだね」

一瞬だけど、両目を見開く真由。光一郎の男肉の大きさに、どうやら本当に驚いたようだ。男性としては、結構嬉しい。

現在大学生でまだ女性経験のない肉角は、くすみの全くない、明るい桃色をしていた。「堅くて立派で……それにとつても、綺麗なの」

嬉しいのか、頬を染めてキラキラした瞳で見とれていた真由は、乾しぼを手にする。

何があるのかと不思議に思う青年に、優しい笑みをくれると、モデルキャストは足下に肉体を滑り込ませた。

跪ひざまずいて、光一郎の両足を開かせると、タツプリと実った爆乳を内股に密着させる。

女体を上から見下ろす形になると、衣装やカップは完全に隠されてしまい、まるで爆乳の半裸の如き艶光景だ。

(ま、まさか……!?)

「えへへ」

セクシーな期待をすると、真由は上気した極上の笑顔で、豊かな柔乳を露出した。

——ふるん……。

小玉スイカも顔負けの爆乳が、光一郎の脚間で瑞々しく揺れる。両手で持ち上げられると、朱色の小さな先端部分がコッチを向いた。

「す、すごく大きい……」

脚間は乳脂肪でイッパイ状態。しかも内腿には暖かい重さが乗せられていて、それだけで更に、男の腰が熱くなる。

「この前撮ったイメージDVDでね、透明な棒を挟んで撮影したの。真由ね、すりこぎを買ってきて、一生懸命練習したんだ」

褒めてほしい子供のように話しながら、目の前の堅肉に乾しぼを当てた。ペニス裏側の弱点に、触れるか触れないかの絶妙な宛て方。

「でもね、男の人にするの初めてだから、ヘタだったらごめんね」

ニッコリと微笑みながら、真由はそのまま、爆乳に勃起を挟み込んだ。

——ふにゆり…。

「んん……！」

暖かくて柔らかい密着に、つい息が漏れてしまう。ペニスから腰の奥に向かって、ゾクンとした性感が走った。肉体のイカ所を挟まれているだけなのに、女体の柔らかさで全身が弛緩させられてしまう。

(……これが、女の人……)

初めての、しかも濃厚な接触到、光一郎の意識が性興奮だけで包まれてゆく。本来ならキャバクラでは絶対禁止の行為なのに、女肌の柔らかさの中では、そんな認識も完全に消失してしまっていた。

「これはね、『乾しほパイズリ』っていうんだよ。真由独特の、セクシーポーズなのよ」
そして、背もたれに深く身体を預ける青年の姿に、真由は嬉しさいっぱいの奉仕を始める。

「えへへ、気持ちいいの？ 光くんったら、可愛いのね〜」

勃起を挟んだ爆乳を、両掌で強く寄せて、上下に摩擦をする。

——ぷるするりゆ、すゆりすゆり……。

「あふっ——ま、真由さん……っ！」

暖かくて柔軟なのに、張りりと弾力のある真由の双乳。艶やかなスベスベ脂肪で包まれる

ペニスは、ジリジリとした性感で更に硬直させられる。わずかに上下する絶妙接触のオシボリには、そのサラサラ生地で、絶えず弱点を刺激され続けていた。

男性器本体の全ての肌が、初めての性感で興奮する。女肌と満遍なく密着している勃起の肌全体から、腰の奥に向かって原初的な力が、滝壺の如く溜められてゆく。

初めての性感に、光一郎は目を開けていられなくなる。そんな年下青年が愛おしいらしく、爆乳お姉さんは優しく、少し熱っぽい言葉をくれた。

「あら、また熱くなった……うん……光くん、素直なのね」

言われた通りだった。勃起は性感に耐えるように、更なる奉仕を求めるように、熱と堅さを増してゆく。

「き、気持ちいい……です……っ！」

思わず答えると、真由は双乳奉仕の速度を上げてきた。

——むりゆすりすりしゅっ、たふたぶるっむりゆしゅりゅっ！

「はっ——はああ……！」

勃起から腰の奥に向かってくる性感が、更に倍増して濁流になる。男性快感の証、射精の欲求が、急速に高められてゆく。鈴口からは、透明な先走り液が一筋こぼれた。

奉仕する真由も、目の前の青年を優しく見つめ、更に頬を真っ赤にさせる。ペニスと触れ合う乳肌はシットリと汗を纏い、質量と重みを一段増す。

「あふ、んん……うふふ」

腰位置から聞こえる、真由の艶息。思わず薄目を開けると、大きく上下に揺れながら汗を浮かせる爆乳の先端では、朱い媚突が更なる堅さと朱みを魅せていた。

（艶々のおっぱいが……僕のモノを挟んで……）

柔らかく弾む爆乳を視覚でも受け止めると、再びギュつと閉じたまぶたの奥が、真つ白に発光する。もう射精を、我慢なんてできない。

「まっ、真由さん……このままじゃ——」

顔にかけてしまう——。

そんな心配に対し、お姉さんは。

「うふん……もつと？」

無垢のような女性の返事を聞かされた途端、男の腰が条件反射。光一郎の性感は、頂点を強く超えさせられた。

「でっ出ます——！」

「えっ——あきやん……っ！」

——っどぶびゅうううううううっ、びゅくっどぶびゅううっ、どくびゆるううううっ！
谷間から覗く亀頭から、白い粘液が勢いよく放出される。

一方で、素直に驚いた真由は、射精のタイミングを知らなかったようだ。「出ます」の

言葉にペニスを覗き込んだキャストは、その愛顔に真つ正面から、精液を受けていた。

「あん、かかつちゃう〜」

言いながら、谷間に挟んだままのペニスから、勢いのいい放液を受け続けるお姉さんキャスト。頭上に舞い上がった白濁が、広がりながら降り注ぐ。

——ばしゃびた、ペしゃぼちゃ、ぬるり。

真由の前髪に、優しい顔に、なめらかな頬に、白い粘液が纏い付く。

愛らしい鼻筋やポツテリした唇、白い鎖骨や豊かな乳肌にも精液が垂れて、更に深い谷間に流れて、爆乳の間にタツプリの白濁池を作った。

「ああん、驚いちやった〜……男の子って、こんな風に感じるのね〜」

綺麗な顔を穢しながら、真由は優しく微笑んでいた。頬は上気し、ドコカウツトリと瞳を濡れさせている。

（真由さん……なんか、すごくエッチだ……）

などと感じて、性感から降りてくると、ハッと理性の戻る青年。女性の顔に、精液をかけてしまったのだ。申し訳なきで、頭がいつぱいになる。

「あつ、あの——ごめんなさい、その……」

アワアワする光一郎に対し、真由は極上の微笑みをくれた。

「えへへ、光くんが喜んでくれたなら〜、真由すつごく嬉しい〜」



入れてゆく。

「んく、んく……光ひゃんろ…おつきひ……んくん…」

奥まで飲み込まれると、ペニス全体がヌル濡れる内頬で包まれた。更に熱い舌で縦横に舐められると、男性器は性感に耐えるように、更なる力が込められる。

「優美子……僕も、優美子を…」

いい香りのする濡れた秘唇に、尖らせた舌を突き当てる。粘膜に食い込ませたままの舌で、ジツクリとユツクリと、上下に愛撫。

「んひゃんんつ——こ、こふひゃん…そんなひゃ…っ！」

ヌルヌルと舌愛撫をすると、肛門と濡れた媚孔、尿孔までもが一緒に収縮する。

左右の鬚を舐めながら、尿孔と膣孔をクチュプチュと押す。途端に、新しい蜜がトプトプと溢れて、突き出されたお尻が切なそうに震え始めた。

お尻の肌が薄く上気し、霧のような汗を纏う。内股は更に上気していて、周囲の柔肉や濡れた秘処は、濃い桃色に染まる。

「んふん、んん……こうひゃん…した、すごひい…ちゅぶ、くちゅ……」

女性器を性感責めにされながら、更に口内愛撫を続ける幼なじみ。快感で気がつかないのか、衣装がずれて豊かな乳房がこぼれていた。

上あごの起伏でペニスの先端を刺激されると、上下逆だから、裏側の敏感な場所が責め

られる。柔らかい内頬で滑られながら、ヌルヌルの熱い舌で本体を舐め回されると、鈴口や肉傘の薄い皮膚の裏側が、何度も何度もこすられた。

絶え間ない刺激で、ペニスには常に力んだ興奮状態。更に目の前の女性器を味わっていると、男の肉体は射精の欲求で占められてゆく。

「ゆ、優美子……このままじゃ、優美子の口とかに……！」

射精が近づくと、次第に気遣う余裕も奪われてしまう。今のうちにと告げた青年に、幼なじみは優しい返答をくれた。

「んん……いひよ……こうひゃんの、らもん……このままれ……ぷちゆく、ちゅうう……」

「え、でも——うぐぐ……っ！」

再び愛撫が施されると、更に吸引まで加えられ始める。タップリの唾液を与えられて熱い舌で愛撫されて、内頬や上あごで本体の弱点を責められながら、強く吸われる。

（また、優美子の口に……！）

そう思うと、もう射精の欲求が止められない。光一郎は幼なじみの口内で達したくて、自らも腰を動かし始めた。

——くちゆるつぬるつちゆつ、ちゆぶつゆぶぬるりゆつぷちゆくちゆつ！

「んっんんっ——んぷふんっんちゆぶちゆつ……！」

突然の突き上げに驚いたものの、優美子はすぐに、こちらの突き込みに唇奉仕を合わせ

での絶頂を得たからか、少しボウっとした、艶めく色を魅せている。

青年が見つめる恥ずかしさから逃れるように、射精を終えたペニスを舌で綺麗に拭つてくれた少女。

「僕のが……優美子にかかつてる……！」

安堵にも似た表情と、自分の精液を受けたままの幼なじみを見ていた青年は、更に勃起が堅くなるのが解った。

射精したばかりなのに、更に雄々しく立ったペニスの姿に、優美子も恥ずかしがりながら視線を奪われている。

「——つこ、光ちゃん……さつきより、すごくなってる……！」

恥ずかしさよりも愛しさが勝っているのか、胸まで赤くなりながらも、震える瞳で勃起を見つめる幼なじみ。

「優美子が口でしてくれたから、もっと欲しくなっちゃったよ」

そう告げると、少女の瞳がわずかに揺れた。

「も、もう……光ちゃんつてば……」

その声は、怯えではない感情で震えている。衣装の乱れた優美子を抱きしめると、今度は青年が上になった。胸で押された柔らかく豊乳は、女体の汗と性熱でシットリと暖かい。力の抜けた様子の幼なじみを、仰向けのまま開脚させる。めくれたミニスカートの中で

開脚した秘処は、まさしく花の中心のように牡を誘っていた。

濡れた姫孔にペニスを充てると、優美子の全身がキュンつと跳ねる。

「ひゃっ——こ、光ちゃん……！」

不安と期待が混ざった複雑な表情の幼なじみ。青年は安心させたくて、長いまつげが綺麗なまぶたに、そつとキスをした。

「大丈夫、優美子は力を抜いて、僕に任せて」

「う、うん」

数秒間見つめ合うと、少女は青年の首を両腕で抱く。秘唇の熱と蜜に触れているためか、男性器はグンつと堅さを増す。

「行くよ……」

——ちゅむぶ……つぶぶ……。

「ひん……！！」

男性の身体で一番堅い肉棒を、女性の肢体でもつとも柔らかい粘膜に挿入してゆく。鈴口が埋まり、亀頭部分を押し込み、高く開いた肉傘を通過させる。

「——んっ……はあ……あはあ……」

行き止まりみたいなキツさに当たると、ペニスが処女膜に触れたと解る。

処女喪失の期待と怖さで幼なじみの息が乱れ、裸の乳房が激しく上下。汗を浮かせる豊

かな双乳は、緩やかに大きく揺れていた。

(優美子、辛そうだ……)

やはりというか、緊張で身体に力が入っている。このままでは、きつと痛いだろう。

破瓜の痛みを少しでも軽くしてあげたくて、光一郎は優美子の豊乳を揉み上げる。

吸い付くような左右の乳房を外側から包むように持ち上げて、寄せながら両の先端をクリクリと転がし合う。プニプニと硬い桃色の乳首は、乳脂肪ちらしぼう以上に熱かった。

優しく触れさせ合うと、媚突が赤く硬化をして、少女の背筋に甘電が走る。

「ひややんっ——はひん……！」

肢体をしながら悶えた直後、肉体の力がクタリと抜ける。そして光一郎は、ペニスを強く突き入れた。

——っぴっつ！

「あんっ——こう、ちゃん……！」

白い女腰が一瞬だけ力み、ゆるゆると脱力をする。勃起を含んだ膣孔からは、赤い喪失血が一筋流れた。

光一郎は今、幼なじみの初めてを捧げられたのだ。キツかった行き止まりの感覚が消失すると、膣壁は柔らかい綿のような優しさで、男性器を受け止める。

「優美子、大丈夫？」



青年に向けられる、涙を浮かせた瞳。こらえる痛みと同時に、一つになれた喜びでキラキラと輝いていた。

溢れそうな涙を人差し指ですくつてあげると、少女は恥ずかしそうに告げる。

「うん……光ちゃんの、好きなようにして……いいよ……」

頬を染めて微笑むその表情は、相手の事だけを想う、女性の優しさで輝いていた。

だから光一郎も、なるべく優美子を喜ばせてあげたいと思う。

「ありがとう……優しくするからね、優美子」

もう一度、まぶたにキスを送ると、ゆつくりとペニスを奥に進める。

——つぶちゆる……つぶちぶ……

龟头部分が膣孔を通過し、本体が飲み込まれてゆく。太くて熱い肉の角が奥深く挿入されるに従って、幼なじみの表情には、追い詰められるような満たされるような、女性の不思議な苦悶が浮かんだ。

「はああ……おくに、こうちゃんが……んうん……!」

根本まで完全挿入を果たすと、優美子の眉根は弱々しい八の形に下がっている。奥まで埋める肉棒に女体が責められるのか、切なげな吐息をもらしながら、締まった上体を拙く左右にくねらせる。

更に勃起本体が抱かれる膣壁には、フワリと柔らかく、しかし強い締め付けを味わわさ

れていた。

「んはん、んんん……こうちゃん、おくが、ジンジンする…どうにか、してえ…」

首を抱かれて、救いを求めるような泣きそうな視線で、下から見上げられる。それだけで青年の男性本能は、強く刺激をされてしまった。

（優美子……なんて可愛い…っ！）

この少女の中に射精したい。そんな原始的な欲求が強く湧く。ゆつくり優しく抽送しようとして心に決めていたはずなのに、肉体は本能に勝てなかった。

「僕も、優美子と…！」

——つぶぬるりゆ、つぶつぶちゆるぶ……つぶつぶちゆむ、ぬゆるるる……。

腰を動かし始めると、幼なじみの柔壺感覚に、青年の腰と脳が歓喜をして、理性が追い詰められてしまう。

（こ、この感覚は……！）

優美子の膣壁は、所々に襞と粒が混在するだけでなく、緩いうねりを描いていた。

ペニスをゆつくり引き抜くと、柔肉を巻かれるように締め付けられて、奥まで突き入れると優しく絞られるように包まれる。

腰を引くだけで傘の裏と本体裏側の筋を何度も撫で上げられて、突き込むと膣孔を何度も姦通するような、抱きしめ。

溢れる程の嬉しさを覚えながら、同時に、なぜ、という疑問もあった。

「あの…どうしたの、みんな…?」

「どっ、どうしたもこうしたも、なないわよ…!」

さっそく答えてくれた幼なじみは、赤くなつてふくれたまま、言葉を囁んだ。そして続く少女たち。

「光くんがね、会いに来てくれないから、さみしくなっちゃって」

「それでみんなで、様子を見に来た」

「そういう事ですの」

五人が自分の事を心配してくれていた。そう思うと、胸がジンと熱くなる。嬉しさに顔がほころんで、思わず赤くなつてしまう。

光一郎の表情を見て、みんな安心したらしい。一步前に出た優美子が、命令みたいな口調で告げた。

「とっとにかく、せっかく来たんだから、その…みんなで、ど同伴して、あげるわよ!」
更に桜乃も、高貴な少女のイタズラ、みたいな流し目をくれる。

「こんなにもたくさん女性の迎えに来させるなんて…光一郎様ったら、罪深い殿方ですわ」

「いえ、あの…」

嬉しい言葉だ。だからこそ青年は、男としては恥ずかしい事実を告げなければならなかった。

(そうだよね、みんなが心配してくれたんだから…)

「あのさ、みんな……」

少し躊躇したものの、意を決して話す。

「実は僕：叔父さんのトコでのバイト、クビになったんだ……まあ、クビって言っても、たぶん春先までだけ……」

だからお金がなくてお店に行けない事や、バイトを探しているけどなかなか見つからない事など。男子にとっては、女子に話すに恥ずかしい事ばかりだ。

執事さんは礼節をもって、背中を向けてくれている。光一郎の告白を、少女たちは黙って聞いてくれた。

そしてすぐに実情を理解する、幼なじみ。

「もしかして、お店に来るために、アルバイトを探しているの?」

「ま、まあ……っていうか……僕もみんなに会いたいし……」

と、白状すると、優美子は心配そうにプンと視線を逸らす。

「お、お金がなくなったって……光ちゃんだったら……」

何が言いたいのかは、空気で解る。みんな同じ意見のようだ。でも男としては、その優

しさに甘えるワケにはいかない。

「ありがとう……でもやつぱり、みんなの仕事は邪魔したくないし、ちゃんと自分の力で応援したいしさ。僕は自分で稼いで、またお店に行くよ！」

「光ちゃん……」

素直に言ったら、かえってスッキリした。胸のつかえが下りたような気持ちよさ。明日からのアルバイト探しも、がんばれそうだ。

意気込みを新たにしていると、女性陣からは予想外の反応が返ってきた。

「……もう、光ちゃんてば……！」

優美子と桜乃は赤くなって不満顔、真由はニコニコとっていて、双子ちゃんは無表情ながら瞳を揺らめかしている。

青年には、何の事か解らない。

「……？ あ……」

幼なじみとお嬢様が、ちょっと悔しそうな、しかし嬉しそうな複雑な表情で、ズイと詰りめ寄ってくる。

「えっと……さ、寒いから、アパートの部屋に……い、入れてよ……！」

「へ？ どしたの、急に……」

「女にここまでさせるなんて……本当に、罪な殿方ですわ……」

何やら解らないけど、五人とも光一郎の部屋に入りたらしい。お嬢様は執事さんを氣遣つて、車内で待つように命じた。

「あの、汚い部屋だけ……いいの？」

女の子が来るなんて、全く予想してなかった。鍵を開けて中を掃除しようと思つたら、五人はそのまま部屋に上がつて来る。

四畳半とキッチンとトイレとバスだけの狭い部屋は、モノ自体、あまりない。

「何もないけど、座つてて。今何か飲み物を……」

用意しようと思つたら、幼なじみが青年の手を取る。耳まで真っ赤になつて、視線を逸らしながら、思い切つて言う少女。

「こつ、光ちゃん……アルバイトをクビになつて、落ち込んでるみたいだから、そのつ……私たちが、元氣を出させてあげるわっ！」

「え——っん」

どういう意味か聞こうとした途端、桜乃の唇が重ねられた。優美子はどうかやら、自分がしようと思つたら割り込まれた、と怒っている。

「ちよつ——桜乃っ……！」

「ああら、わたくしの車で、ココまで送つて差し上げたのですよ……ねえ、光一郎様」
お嬢様は抱きついてくると、ワンピースを突き出す巨乳を胸に押しつける。柔らかくて

暖かい胸脂肪を充てられると、男の肉体が興奮の熱を上げてきた。

「えっと、あの……」

青年が戸惑っている、背中からお姉さんが抱きついてくる。コートの上からでも解る爆乳の感触で、背中の力が抜けそうだ。

「えへへ……みんなで光くんを、応援してあげるね」

「わたしたちも、こう様を応援する」

(みんな……)

女性たちの想いが、心にとても暖かく染み込んでくる。自分は思っていた以上に、みんなに慰められているのだ。

それぞれに両掌を取られると、光一郎は女の子に身柄を拘束される。桜乃の横に割って入った幼なじみは、青年をチラと見上げながら、ホッペタを膨らませた。

「いいもん……私だって、後でいっぱい……」

赤面する女の子たちに連れられて、光一郎はベッドに腰掛ける。

みんなに上着を脱がされながら、目の前では桜乃がコートを脱いでゆく。巨乳を強調するワンピース姿で、マフラーのお嬢様がベッドに上がってきた。

甘い芳香を漂わせる深い谷間が、下向きで大きさを増して目の前に迫る。暖かくていい香りのする柔乳が近づくと、男の股間は更に血を集める。

「最初はわたくし、ですわ……うふふ」

ヒザ立ち姿勢で後ろを向いて、背中を預けるように青年の胸に密着すると、お尻をスリスリと押しつけてきた。

薄いワンピース越しの柔らかいお尻に、堅い勃起がプニリと押される。

「わたくし、キャストでの一番よりも……光一郎様にとつての一番が、いいですわ……うふ」
お尻を充てたまま、女尻を突き出す四つん這いになると、上着を脱いだ女の子たちが光一郎の衣服を解き始めた。ニコニコの真由に、セーターをめくられる。

「えっあの……みんなで……？」

「だだって……みんなで元気つけてあげるって、約束したじゃない……！」

恥ずかしそうに答える幼なじみが、ジッパを下ろしてくれて、双子ちゃんの手でトランクスを下げられる。

大きなペニスグンつと天を向いて露出すると、部屋の空気が少女たちの性興奮で染まるのが感じられた。

「わたくしの肌は、どうか光一郎様の御手で……」

桜乃に促されて、お尻に張り付くワンピースをめくり上げる。Tバックに飾られた丸いお尻には、黒いガーターベルトがムッチリと食い込んでいた。

天井の明かりを艶々に返す白い肌。長い金髪がわずかにかかり、Tバックのお尻を更に

エロティックに引き立てている。

「お尻……すぐくエッチですね……」

「光一郎様のための、肌ですもの……」

剥きだしの勃起にTバックのヒップが押しつけられて、クニクニとこね回される。

くねられるお尻に時計回りで撫でられると、男性器は更に硬化して、青年の欲求は一段と強くなった。女のお尻を掴みたいという、男性本能が刺激される。

「さ、桜乃さん……!」

暖かく上気する女尻を掴むと、ヒクンと反応。光一郎の心臓も早鐘を打ち、知らずに息が乱れてくる。

汗ばむ掌で、黒系のTバックを下ろす。隠されていた全てを背後から露出させると、既に秘唇も後孔も、自身の蜜に濡れていた。

「あん、光一郎様ったら……恥ずかしいですわ……」

異性の視線を受けながら、その声にはハッキリと艶が混じっている。恥ずかしそうに震えながら、更にお尻を突き出すお嬢様。

肛門がわななき、閉じられていた秘処が、くちゆりと開く。

そして、桜乃のライバルであるはずの、幼なじみの掌に導かれながら、青年はお嬢様と性器を合わせた。

どうやら男性には解らない、女性特有の連帯感みたいなものがあるのかもしれない。

——っふ……。

「んうう……光一郎様の……早く、ください……！」

亀頭の先端が触れただけで、膣孔はペニスに吸い付くようにすぼまる。背後位で腰を進めて勃起を突き入れると、膣壁は柔らかい綿みたいのに、フワリと受け入れてくれた。

「わたくしの、中が……ああああ……あつい、あなたなので……」

根本まで挿入すると、四つん這いの姿勢がクタリと崩れる。お尻を突き上げる恥ずかしい姿勢が、脱ぎかけたワンピースで更にセクシーに演出された。

頬を上気させながら、強気なツリ目には涙が浮かび、既に肩で息をしているフワ髪の少女。

（桜乃さんの、中……すごく、熱くて、ヌルヌル……！）

熱く濡れる膣壁でペニスを抱きしめられると、青年の腰には性への強い欲望が溜められてゆく。このままセックスの快感を味わいたい。

「う、動きます……っ！」

言葉と同時に、光一郎は腰を動かし始めていた。両手で尻を抱きながら、最初はゆつくりと、次第に早く、抽送をする。

——っふりゅっちゅぷっふ……ちゅるぷっちゅぷっゆっ、ぶゅぷりゅぷっちゅぷっゆっ！

「あはんっ、はあっはああ——そんなにつ、おくまでえっ……！」

腰を打ち付けると裸尻が波打ち、部屋中にピタピタとイヤらしい裸肉の打ち合う音が響く。女体の肌は汗が浮かび、背筋を反らせた四つん這いお嬢様のワンピースが乱れ、巨乳が片方だけこぼれ出ていた。

「わたしたちも、えへへ」

背後から抱くお姉さんが、衣服の中に手を滑らせてくる。細くて柔らかい指で、光一郎の乳首が転がされた。

「んひっ——くすぐりたい、です……」

青年の反応を、喜んでいると感じたらしい。女尻を掴む両腕が、ブカブカセーラーの長袖をめくり上げた双子ちゃんに取られた。

「わたしたちも、する」

幼い容姿をした裸の胸で、それぞれの腕を肌愛撫される。柔らかくてツルツルの胸肌で腕を撫で上げられて、更に掌を、ミニスカートの下のショーツに充てられた。

薄布越しで掌に触れる秘処は、興奮の熱を帯びている。

（う、腕も、掌も……くすぐく、熱い……！）

熱に誘われるように掌を動かし、下着の上から感じる割れ目に沿って、指を這わせた。

「んくん……っ……う様……」

「弱い箇所を指で撫で上げると、清白姉妹は身体の力がクタリと抜ける。息の乱れる小柄な肢体を、両腕に預けてきた。

そして幼なじみは青年の頬を手にとると、唇を合わせて、更に深く、恐る恐る舌を差し込んで、絡ませる。

「ちゅ、んちゅ…光ちゃん…ちゅぶ、んちゅん…」

（優美子の舌…美味しいな…）

胸と両腕と唇で、それぞれ別の女性からの愛撫を受けていると、男の肉体には不思議な強さが宿ってくる。

（早く…みんなと、したい…！）

全身から性力が溢れるようで、腰も勝手に力を強めた。突き込む勃起が太さを増して、上がった熱を女体に味わわせるかのように、深く激しく突き込む。

——つつゅぶりゅちゅぶつつゅちゅつ、ぐゅぶちゅりゅぶつつゅぶつつゅぶつ！

堅い肉の抽送に対し、熱く濡れる蜜壺は、更に抱きしめ奉仕を強めてきた。

粒々の贅でペニスの性感帯が愛撫されて、突いても引いてもこすり上げられる。脈動する勃起も、本体から根本へ、更に腰の奥へと、射精への力が溜められてゆく。

転がされる乳首からは、胸から背筋、腰へと微弱な性感が駆け抜ける。

双子姉妹の女性器の、熱と形と柔らかさを堪能する両掌は、ペニスで感じる締め付けと

脳裏で合わされ、突き込むタイミングで割れ目を撫で上げた。

そして唇を合わせて舌を絡ませながら、幼なじみの官能的な吐息を感じる。ミントのよ
うな香りの唾液と、性感の艶が混じった小さな鼻息が、少女の性興奮を表していた。

全身で女性を感じていると、青年の性感が急速に追いつけられてゆく。触れ合っている
箇所以外の肌感覚が消失して、ペニスにギュつと力が籠もる。

「あああんっ——なかで、こういちろうっさまのっ……ふとくううっ……！」

背筋を反らせると、桜乃のお尻は更に突き出されていた。汗で艶めく女尻が上を向いて、
濡れる恥肛がキュつと締まると、同時に膣壁が締め付ける。

（——っ!!）

勃起から脊髄に向かって快感が走り、意識が真っ白に染まる。射精は、もう目の前。
そして強い突き込みをしたと同時に、青年の腰がビクンつと跳ねた。

（——っイクっ!）

同時に、お嬢様も白い背中を大きく反らせて絶頂を得る。

「あはんんんっ——わた、くしいいいいいっ……このまま、こういちろう、さま、とう
ううううううううううううっ……！」

結合部までが照明に照らされる程、お尻が突き上げられると、更にペニスはヌリユリユ
つと締め付けられた。



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

あとみっく文庫最新刊

ちょっと大人のライトノベル / 毎月下旬ぞくぞく刊行中!! 定価 / 690円(税込)



全国書店で
好評
発売中



「…藤田君は責任取るべき」
睦月への想いに身を焦がすマキナ
彼女は夜の教室で……!?

思春期なアダム3 一人泣きの子猫

「小説・さかき傘 / 挿絵・天海雪乃」



全国書店で
好評
発売中



「当方Mドレイ希望」
魔界最強のプリンセスがドレイ志願!?

不死の吸血姫がDSのご主人様を募集
しているようです

「小説・酒井仁 / 挿絵・にのこ」



女幹部メル様の
セカイ征服計画!

「小説・高岡智空 / 挿絵・鈴原依縫」

全国書店で
好評
発売中

悪の秘密結社vs正義のヒーロー
イケない戦いの記録!



既刊LINEUP ● 仙聖字態戦姫 / ブナガツ ①～③
● 純魔 / 帝都少女探偵団 赤い謀略を撃て!
● BLANGEL 輪になりに踊る悪魔の夜

● 借金お嬢小姐 ①～③
● プリンセスリバーシ! 交錯する美姫と魔姫
● 無敵の短剣士がSMに目覚めたようです

● ビルグリムメイデン ①～②
● 歌組後らい節 / カースイーター-1
● 魔海少女ルレイ・エル

発行◎株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコビル TEL:03-3555-3431(販売) FAX:03-3551-1208

最新情報は公式サイトへ! あとみっく文庫 検索

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
- ◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利!
来かねる場合がございます。お問い合わせはメールでもお手数ですが再度お問い合わせください。
- ◎二次元編集部**の愉快的Blog**も更新中!



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!

二次元ドリーム文庫146

僕の幼なじみがキャバ嬢なわけがない [PDF版]

著 者

大熊狸喜

装 丁

マイクロハウス クリエイティブ事業部

発 行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富 1-3-7 ヨドコビル1F

●編集部 TEL.03-3551-6147/FAX.03-3551-6146

●販売部 TEL.03-3555-3431/FAX.03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、
ホームページ上に転載することを禁止します。

本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。

また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©Okuma Tanuki ©KILL TIME COMMUNICATION 2010

当ファイルは、二次元ドリーム文庫「僕の幼なじみがキャバ嬢なわけがない」
(2010年4月17日 初版発行)に基づいて作成しております。

<http://ktcom.jp/>